山梨新報（2009 年 12 月 11 日）

12月11日（毎週金曜日発行）
40 since 1969
2009年(平成21年) 第2581号
山梨新報 Yamanashi Shinpou

講演会から LECTURE

講師 福留 強 さん

子ども主役の地域活動を

沢題 子どもを健全に育てるまち

山梨市などはこのほど「子どもをほめて育てる研究会in山梨」を開き、聖徳大学生涯学習研究所長で「全国子どもをほめよう研究会」代表の福留強さんを招いて「子どもを健全に育てるまち」と題した講演会を開いた。

まち全体で褒める

20市町村で子ほめ条例

日本人は褒めることも、褒められることも苦手だ。だから子どものことも、十分に褒められていない。しかし、一言の褒め言葉が、その子の人生を変えることもある。

栃木県国分寺町（現下野市）では1985年、市町村が児童生徒を表彰する条例（通称子ほめ条例）を全国に先駆けて制定した。

同条例では、町内（市内）に居住する児童、生徒を小学1年～中学3年の義務教育修了までに、一人残らず表彰する。表彰される生徒は一般的に、学校推薦と地域推薦で決まるため、学校教育だけでなく、家庭や地域における子どもたちの優れた能力にスポットを当て、評価することが特徴だ。つまり、教師や地域住民、家族が皆で子どもを見守り、まち全体で褒めるのである。

同市では、学芸、親切、努力、スポーツ、奉仕の五つを柱に表彰を行っている。

同市のほか、これまで約20の地方公共団体が同条例を制定した。表彰内容もユーモアやスマイル、健康などと多様だ。

褒められ、認められることで、人はやる気が出る。特に尊敬する人物からの褒め言葉は、大きな勇気を与えてくれるものだ。

やがて大人への信頼感へ

子ほめ条例のまちでは、さまざまな成果が出ている。例えば、2003年「第1回全国子どもをほめよう研究大会」が開かれた大分県の前津江村（現日田市）では、子どもが、表彰されたことへの自信や誇りに加え、「いいことをすれば必ず、地域の大人が見ていてくれる」という大人への信頼感を持っていた。

一方、大人は子どもを褒めることの難しさを学んだ。より効果的に褒めるためには多イミングが重要だ。

他の子どもと比較せず、一人ひとりの成長や発達に注目しなければならない。

その結果、地域全体が子どもに関心を寄せるようになった。

また、表彰する大人自身も、子どもから尊敬される人物になる必要性を痛感した。

社会体験参加のすすめ

子どもを褒める機会を増やすために、地域活動の中で子どもを主役にするのもいい。

東広島市では、小学生がガイドになって観光客を案内しているほか、和歌山県みなべ町では、特産の梅について学ぶ講座で地元中学生が講師を務めている。

また、岡山県の田中美術館では中高生が作品の解説を担当している。

ある時、金髪でピアスをした男子高校生が絵の解説をしていたが、大勢のお客さんの間で緊張し、手が震えていた。しかし、この経験は彼にとって有意義なものだったに違いない。子どもの地域参加は、学習発表の場であると同時に、大人や他の世代とかかわり、普段できない体験をする場でもある。

子ほめ条例には、青少年健全育成だけでなく、地域のコミュニティー形成というまちづくりの狙いもある。住民の協力が不可欠だからだ。子どもを媒体にすれば、地域の教育力は高まっていくと信じている。

ふくとめ　つよし
1940年鹿児島県出身。鹿児島大学卒業。中学校教員、国立社会教育研修所教務課長、文部省社会教育官、九州女子大学教授など歴任。98年から現職。01年「全国子どもをほめよう研究会」設立。ほかにNPO法人全国生涯学習まちづくり協議会理事長など。著書に『子ほめ条例のまちは変わるのか』など。